調査団体名	南木曽木材産業株式会社	団体代表者名	柴原薫
設立年	昭和37年(1962)	団体URL	http://www.nagiso.co.jp
活動地域	長野県南木曽町・名古屋市	調査員	杉野
取材日	2009/12/2	レポート作成者	杉野賢治

木曽檜の誇り

＜活動内容＞

1)木曽檜の製材・販売:愚直なまでの木曽檜に対するこだわりを大切にしている。
2)名古屋市民に向けて、間伐・枝打ちなどを行っている:先代から受け継いだ、流域における上流の役割をまじめに考えている。20年前から名古屋市民を山に迎え、自分たちが毎日飲んでいる水の水源森として、どれほど大切な存在かを訴えてきた。現場を見てもらい、水を生み出す山を守り、存続させるためには手入れが必要だと分かってもらう。
3)山林経営講師:代々引き継がれている山との関わりを伝える。
4)セミナー主催:個人的な人脈を活かし、多岐にわたる業種との交流セミナー。
5)檜使用の木工製品開発・販売:木曽檜を少しずつでも知ってもらうための、ささやかな挑戦。
6)伝統的な山仕事の保存:三つ紐伐り→伊勢神宮、式年遷宮に関わる。

＜会のモットー(何を大切にしているか)＞

言動一致。守破離の精神。伝統的なものを守りつつ、挑戦すること。人に対し、ひたすら感謝をすること。

＜設立から現在に至るまでに変化したこと＞

ユーザーの満足感が変ってきた。設立当初は、大きくて立派な家が喜ばれたが、今は住む人の幸せ感が喜ばれる。大きくて立派なモノ(人に見られてナンボ)から、小さくても満足できるモノ(自己評価)に変わってきたようだ。

＜連携している団体・専門家・自治体など＞

伝統木造協会、江戸城再現運動、日本熊森協会

＜今までに行った調査・研究＞

式年遷宮に関わる調査、造営用材調達

＜現在直面している課題＞

市民と現場の温度差を埋めること。以前に比べ、かなり市民の意識も山に向かってきた。しかし、まだ市民の温度は低いようだ。山側の人間は死活問題でもあり、頑張っている人が多い。何とかつなげられないものか・・・。

＜今後やってみたいこと＞

若者が骨を埋めてもいいと思える地域づくり。山で暮らし、山仕事に生き、小さな幸せを積み上げるような地域をつくりたい。

＜そのためにはどんな情報・人脈が必要か＞

都市と山をつなぐ役目の人、大都市市民(名古屋市民)の本当の気持ち。

＜チームオリジナルの質問＞

質問内容:	柴原さんがまず頭に思い浮かべることは？
答え:	自分の役割を見つけるために、絶えず頑張っている。 本気・本腰・本物。 自分の役割は、切り開くこと、引き継ぐこと、見守ること。

＜その他、伝えたいこと＞

木曽川の上流域、長野県の南端に位置する南木曽町で製材会社を営む柴原さん。今回は流域ネットワークという観点から話を聞いたのだが、柴原さんの活動そのものが流域ネットワークであると感じた。20年以上前から、市民と山をつなぐ役割を担ってきて、それが当たり前だという。山で働き、生活できているという立派な事例である。人脈の広さは驚愕に値する。

柴原さんは自らを「木曽屋柴蔵」と称し、「山が教えてくれた　子供に伝えたい　いい話」という小冊子を自費出版している。その序章にはこう書かれている。

「木は氣なり」。日本人は、古来より木と共に暮らしてきた。そして木は、人の目には見えないけれど、知らず知らずのうちに、そこに住む人に力を与え続けてきてくれたのだ。

また、こうも書かれている。

「損得勘定だけで生きる時代は終わったのです。自分の子どもたちのために、日本の未来のために」

南木曽の風景

柴原氏

南木曽木材